

SANGAKUMI ISEKI

三ヶ組遺跡 I

— 県営畑地帯総合整備事業西洗馬工区幹線道路工事に伴う緊急発掘調査報告書 —

2006.9

朝日村教育委員会

序

埋蔵文化財は、私たちの遠い先祖がこの地に力強く、また、生き活きと生活した証です。遺構や遺物を目にすると、当時の息吹を直に感じとることができる人類の宝と言えるかもしれません。

このたび、県営畑地帯総合土地改良農道整備事業に伴い「社宮司遺跡」並びに「三ヶ組遺跡」を試掘調査したところ、三ヶ組遺跡から遺構が発見されたため、初めて発掘調査を実施することになりました。今回の発掘場所は遺跡の中心部からは離れているものの、三ヶ組遺跡は朝日村でも最大規模の遺跡といわれ、以前から耕作中に土器が大量に掘り出される事例がありました。この調査・報告書により朝日村の縄文～中世の歴史解明に役立つ資料となり、文化財の保護施策に理解を深めていただければと願うものです。

事業主体の長野県環境森林チーム、ご指導いただいた長野県文化財生涯学習課、発掘調査、整理報告作業にあたっていただいた今村克氏をはじめ作業員のみなさま、ご指導・ご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

平成18年（2006年）9月

朝日村教育委員会

教育長 中村 忠明

例言

1. 本書は平成18年5月30日～平成18年6月13日に実施された、朝日村に所在する三ヶ組遺跡第1次調査の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は県営畑地帯総合整備事業西洗馬工区幹線道路工事に伴う緊急発掘調査であり、長野県松本地方事務所より朝日村が委託を受け、朝日村教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
3. 本書の執筆は今村 克が行った。
4. 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄	荒井 留美子	道浦 久美子		
遺構図整理	荒井 留美子	道浦 久美子	今村 克	
遺物実測	今村 克			
トレース・版組	荒井 留美子	道浦 久美子	今村 克	
総括・編集	上條 大地	今村 克		
5. 本書で使用した遺構の略称は以下のとおりである。

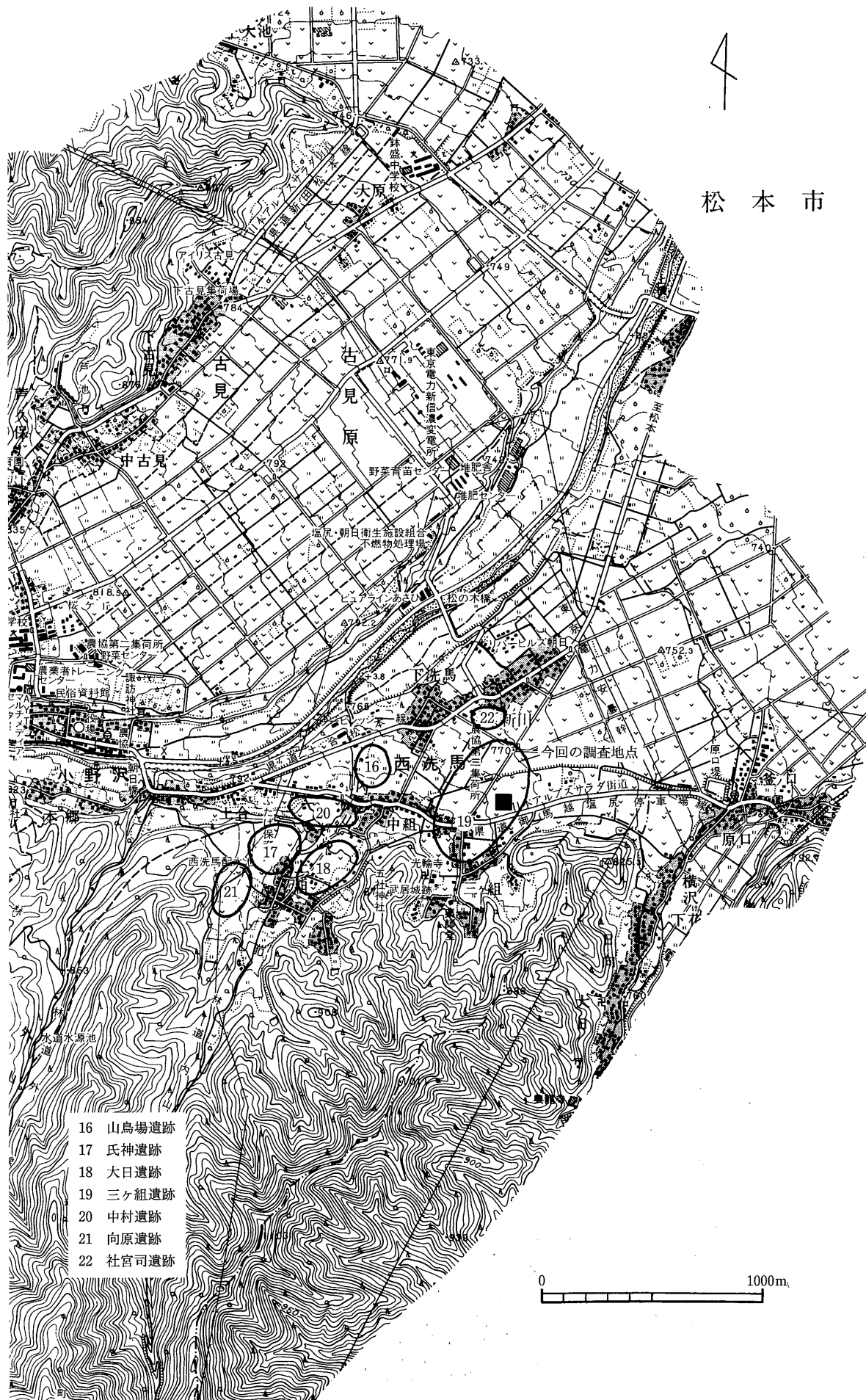
溝址・・・溝	ピット・・・P	土坑・・・土	竪穴状遺構・・・竪
--------	---------	--------	-----------
6. 図中で用いた方位記号は、磁北を示している。
7. 調査実施及び本報告書作成にあたり、以下の方々から協力・教示を得た。記して感謝申し上げる。（五十音順。敬称略）

内堀 団	太田 圭郁	島田 哲男	竹内 靖長	福島 邦男
------	-------	-------	-------	-------

8. 遺構・遺物の記述中で用いた時期区分・分類・用語などは、以下の文献に拠っている。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内1
－総論編」
9. 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録等は、朝日村教育委員会が保管し、朝日村歴史民俗資料館
(〒390-1104 長野県東筑摩郡朝日村大字古見1308)
に保管されている。

目次

序	
例言	
目次	
I. 調査の経緯	2
1. 調査に至る経過	2
2. 調査体制	2
3. 調査日誌	2
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 調査の概要	3
IV. 遺構・遺物	4
V. 調査のまとめ	6
写真図版	7
報告書抄録	18



第1図 調査位置・周辺遺跡図

I. 調査の経緯

1. 調査に至る経過

三ヶ組遺跡は過去、宅地造成の際縄文時代中期の深鉢が掘り出されたり、同時代の土器片や石器が数多く表面採集されたりして、朝日村内においても有数の縄文時代の遺跡であると考えられてきた。そうした中、県営畑地帯総合整備事業西洗馬工区幹線道路工事によって、三ヶ組遺跡内に村道が新設されるため、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、朝日村教育委員会により実施された。今回の事業予定地の内一部については、立会い調査ですで行っていたため、残る三ヶ組遺跡の範囲と社宮寺遺跡の範囲にかかる部分について、調査を行うことにした。

その結果、三ヶ組遺跡内については遺構・遺物が発見された。社宮寺遺跡内の調査では遺構・遺物の発見にはいたらなかった。

こうした経緯をふまえ朝日村役場において、遺跡の保護協議が行われた。出席者は

長野県松本地方事務所	玉村 幸一
長野県教育委員会	西山 克己
朝日村産業振興課	塩原 忠男
朝日村教育委員会	上條 大地
朝日村教育委員会	今村 克

である。

保護協議では、道路工事の掘削深度が現況地面から最大1mの深さまで達することにより、遺構検出面・遺物包含層を破壊してしまうことが明らかになったため、発掘調査を行って記録保存を図ることになった。発掘調査及びこれに係る事務処理については、朝日村教育委員会が実施することとし、長野県松本地方事務所と平成18年5月30日付けで、発掘調査業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は、平成18年5月30日～平成18年6月13日まで行われた。発掘調査終了後は、引き続き朝日村中央公民館において整理作業を行い、本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長：中村 忠明（朝日村教育長）

調査担当者：今村 克、上條 大地

協力者：荒井 留美子、大月 八十喜、道浦 久美子、百瀬 義友、米山 禎興

事務局：朝日村教育委員会

3. 調査日誌

4月 4日：試掘	5月30日：掘り下げ・検出	5日：遺構の掘り下げ	9日：図化・測量
7日：試掘	31日：検出	6日：遺構の掘り下げ	12日：図化・測量
10日：試掘	6月 1日：検出	7日：遺構の掘り下げ	13日：撤収作業
12日：試掘	2日：遺構の掘り下げ	8日：図化・測量	15日から7月31日まで整理作業

II. 遺跡の位置と環境

位置 朝日村は松本盆地の南西部に位置している。村の地形は北西から南西部いわば村の西半分が鉢盛山(2446m)を主峰とする2000m級の山々に囲まれて北東方向の松本市側に開けた形になっている。これら西側の山塊から流れ下る水が鎖川となって村の中央を北東ないし東へ流れ下り、下流域に広がる扇状地・河岸段丘・谷底の沖積地は、現在村の主要な農耕地および生活領域となっている。村内の遺跡の多くもこうした場所に存在している。今回調査が行われた三ヶ組遺跡は、この鎖川右岸に形成された西洗馬原の扇状地平坦面にある。

この平坦面には、三段の段丘崖が現在でも見られる。太古の鎖川の浸食と移動の結果であり、鎖川の流れの激しさが伺える。三ヶ組の古くからの集落は、この平坦面の山際に営まれている。これは山脚に湧き出る湧き水が生活に欠かせないものであったためと考えられる。原始・古代の集落もこの辺りを中心として周辺に展開するのではないかと従来から考えられてきた。

次に三ヶ組遺跡周辺の歴史的環境について述べる。最初に断っておかなければならないのは、当村では熊久保遺跡以外正式な発掘調査がほとんど行われていないという点である。過去の採集遺物や、工事中にたまたま土器が発見されたなどの理由で遺跡として認知されているためにその実態は不明と言わざるを得ない遺跡が多い。ここでは朝日村村誌の記述の中から周辺遺跡に関する部分を引用して歴史的環境を述べるにとどめたい。対象となる遺跡は図1のNo.16～22の遺跡である。(番号は朝日村遺跡分布図による)

縄文時代草創期の有舌尖頭器が氏神遺跡(17)から、縄文時代早期の土器が向原遺跡(21)から、縄文時代前期の土器が氏神遺跡・向原遺跡から、縄文時代中期の土器が山鳥場遺跡(16)・氏神遺跡・大日遺跡(18)・向原遺跡から、縄文時代後期の土器が山鳥場遺跡からそれぞれ出土している。社宮司遺跡(22)からは打製石斧が出土しているが細かい時期は不明である。弥生時代の土器は氏神遺跡・中村遺跡(20)から、また平安時代の土器・陶磁器が氏神遺跡・大日遺跡・中村遺跡・向原遺跡から出土している。中世に関わる資料は、三ヶ組遺跡周辺からは出土していないが宮前遺跡(4)から「双雀蓬莢鐘」が、犬ヶ原遺跡(9)から常滑系の甕・鉄製釘・炭化米が、芦ノ久保遺跡(12)から鉄製内耳鍋・土製内耳鍋が出土している。

以上のように、西洗馬原では縄文時代から平安時代までの遺物が発見されていて、昔から人々が住むための条件が整っていたものと推察される。また、今回の発見によって中世朝日村の解明が進むことが期待される。

III. 調査の概要

三ヶ組遺跡では今まで発掘調査が行われたことがなく、遺跡の実態は不明であった。今回の県営畑地帯総合整備事業に伴う事前の試掘調査において、遺構・遺物の発見があり本調査に至ったわけであるが、試掘調査について若干ふれておく。

試掘調査は、図2に示した。T1～T5の5ヶ所について、重機を用いて巾1mのトレンチを設定して、土層観察、遺構・遺物の確認を行った。各トレンチの調査結果は、写真図版4に示してある。この内T5では、遺構・遺物を発見したわけだが、トレンチ内は黄色土ローム上面で遺構の検出をしているため、いわゆる旧石器時代を含め、下位の土層に関する資料は得られていない。そこで、同トレンチ内2ヶ所で深堀りを行い、深さ2mまでの土層を観察した。深堀り地点と土層は、図2・3に示した。2つの地点間の距離は、

約41mと余り離れていないため、土層はほぼ同じ傾向を示した。調査所見では、図3の区層については、旧石器時代の遺物が発見できる可能性に言及している。しかし土壌分析（主に火山ガラスについて）を実施した上で検討すべきであるとして現時点でその有無を判断するのは保留している。（調査所見は太田圭郁・内堀団氏に教示を受けた。）

こうした試掘調査の結果をふまえて縄文時代以降を対象とした発掘調査を実施した。調査の手順は試掘調査で遺構が発見された調査地南端から北へ向かって範囲を広げていった。まず検出面を黄色土ローム上面に設定し、表土を重機を用いて除去した。以後手作業で検出作業・遺構の掘り下げ・測量・図化等をおこなった。測量・図化には磁北に沿って3mと2mの方眼を設定して行った。

IV. 遺構・遺物

概要

今回の調査では、縄文時代・中世の遺構を確認することができた。遺構の名称については、検出時の遺構の規模によって、土坑とピットを区別した。長径および直径50cm以上のものを土坑、それ以下のものをピットとし、それぞれ番号を付した。竪穴状遺構としたものは、直径2.5m程度の円形ないし、不整形円形と見られたため土坑としなかった。

調査区ごとの遺構分布状況は、A区に主たる遺構がほぼ集中し、B区では、土坑3～土坑7が発見されるにとどまった。C区は遺構が見られず、試掘調査の内容と同じ状況で、遺跡の範囲もこれより北には、広がらないと考えられる。ただし、試掘調査の所見でもふれたが、過去の畑地造成のため土が移動したり、黄色土ローム上面が削平されていて、浅く掘られた遺構や、遺物包含層そのものがすでに失われている可能性が大きいことから、今回の調査結果の遺構の分布および、遺跡の範囲を推定することには、制約があると考えられる。

竪穴状遺構1

A区中央北よりに位置する。東側の一部は試掘トレンチ内にかかっていたが、試掘調査時には検出されなかった。試掘調査で検出できなかったのは、A区より1段低い畑地側にトレンチを設定していることから、過去の造成によって、かなり削平を受けているためと考えられる。

規模は、直径2.5mのほぼ円形を呈する。壁は斜めに立ち上がる。深さは最大25cmを測る。底面は平坦だが固くしまっていない。覆土は大きく3層に分けられる。堆積の状況は自然堆積だと考えられる。

<遺物>

土器と石器が出土している。

土器については、図7.1～4（No.2. 3. 19. 21）は覆土I層からの出土である。小片なので判然としないが、縄文時代中期後半に帰属しようか。同じく図7.5～7（No. 30. 32. 33）は覆土II～III層中から出土している。これも小片ばかりだが、同じく縄文時代中期後半に帰属すると思われる。

石器については、写真図版5に載せたI群の石核が特徴的である。ほとんどが覆土II層下部～III層にかけて出土している。周辺に細かな剥片は無く、石核のみ遺構床面付近から発見された。出土状況から石器製作に必要とするコア部分を集めて置いた場所か、必要な剥片を取った残りを遺棄した場所とも考えられる。

溝1

A区南端に位置する。試掘調査で発見した時点では、トレンチ内で溝址の北辺部分しか検出できず、南側は水道管理設工事によって壊されていたため、住居址あるいは、大きな竪穴状遺構の一部と考えていた。

本調査では、試掘トレンチに接する形で西側部分を拡張した。検出作業を行ったところ、試掘調査で発見した遺構の北辺に続くラインが検出できた。土層観察用のベルトを残して掘り進めたところ、南側が斜めに立ち上がることが確認された。土層観察の結果と合わせて南北に走る人工の溝址と判断した。覆土Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は、畑地造成や農道を作るために盛られた土であって、本址はⅧ層中から黄色土ロームを掘り込んで作られていることが、確認できた。検出面での溝址の巾は、260～280cm、深さは30cmを測る。底面は比較的平らである。覆土最下部Ⅶ層は、小砂利や、鉄分の沈殿がみられ、一時期わずかに水が流れていたり、滞水していた時期もあったと思われる。Ⅳ層からⅥ'層は、黄色土粒を多量に含んでいて、人為的に埋めた可能性がある。

<遺物>

土器・陶磁器・鉄製品・多量の被熱した石などが出土している。

土器：覆土Ⅴ・Ⅴ'・Ⅵ・Ⅶ層中から、縄文土器片やかかわらけが出土している。縄文時代の土器は混入品と思われる。かわらけは、いずれも小片だが12～14Cの所産であろうか。底面の調整痕や器形などをうかがえる資料が無く、詳細は不明である。

陶磁器：灰釉陶器片・常滑産の甕の破片・東海系涅槃鉢片・青磁碗片がある。灰釉陶器は、図示していないが碗の一部であろうか。他は、写真図版5の1が常滑産の甕、2が東海系涅槃鉢、3が龍泉窯系青磁碗の底部と思われる。底部に回転へら削り痕がみられる。

1～3は、いずれも13C～14Cの所産と思われる。

鉄製品：鉄製品は、錆をクリーニングしてないので器種は不明だが、鉄釘が考えられる。

石：被熱した石が多量に出土している。総点数437点を数える。石材は硬砂岩がほとんどを占めている。他に、凹石、敲き石、スタンプ状石器、剥片、二次加工のある剥片など、縄文時代の石器が出土しているが、溝の埋没過程で混入したと考える。今回の調査区は、面積が小さいので、試みに石は全点、出土地点およびレベルを記録して取り上げた。これは取り上げた石の接合関係から遺構間の時期差を求めたり、石器の利用パターンを導き出そうとする方法で、実際に調査も行われている。

(註1) 詳しくは紙数の都合で省くが、従来出土遺物から、遺構の時期を決めがちであった調査方法に、別の判断材料を与えうる可能性を指摘しておきたい。今回取り入れた方法の結果として、遺構間での接合関係は認められなかった。溝1内での接合資料は、図5に示したように幾つかある。これらは比較的近い距離で接合していることから人為的に投棄された石がその衝撃で分散したと考えることが出来よう。多量の被熱した石が投棄された理由を考えると、推測の域を出ないが、周辺に鍛冶施設あるいは調理施設が存在した可能性が考えられる。B区土坑4からは、鉄鏝が出土していることは鍛冶施設が存在した傍証になるだろうか。

土坑・ピット

それぞれの大きさ・断面形状・覆土については、図6に示した。

<遺物>

出土土器拓影を図7に載せた。

8は土1出土で小型の深鉢の口縁部。縄文時代中期後半Ⅰ段階になろうか。9と10は土2出土土器。11は土7出土土器でいずれも中期後半Ⅲ～Ⅳ段階に含まれるか。12はP6出土で把手の一部分、

13はB区検出面出土で櫛形文の一部と思われる。

その他、土4・土5は柱痕と思われる直径20cm程の穴が土坑内にある。調査区内ではこの2ヶ所しか見つかっていないが、掘立柱建物址が存在した可能性も考えられる。

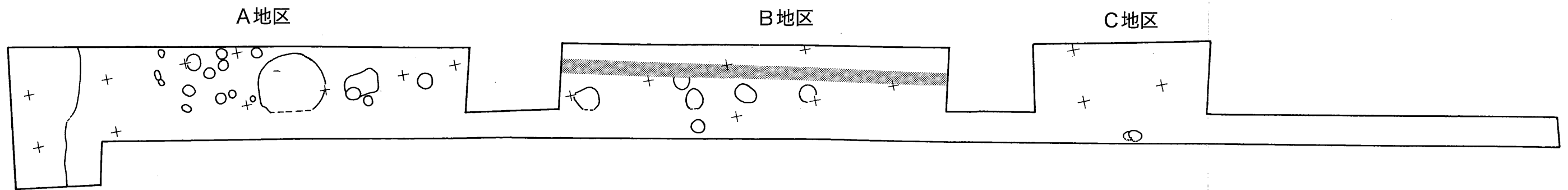
註1、松本市文化財報告No.171

V. 調査のまとめ

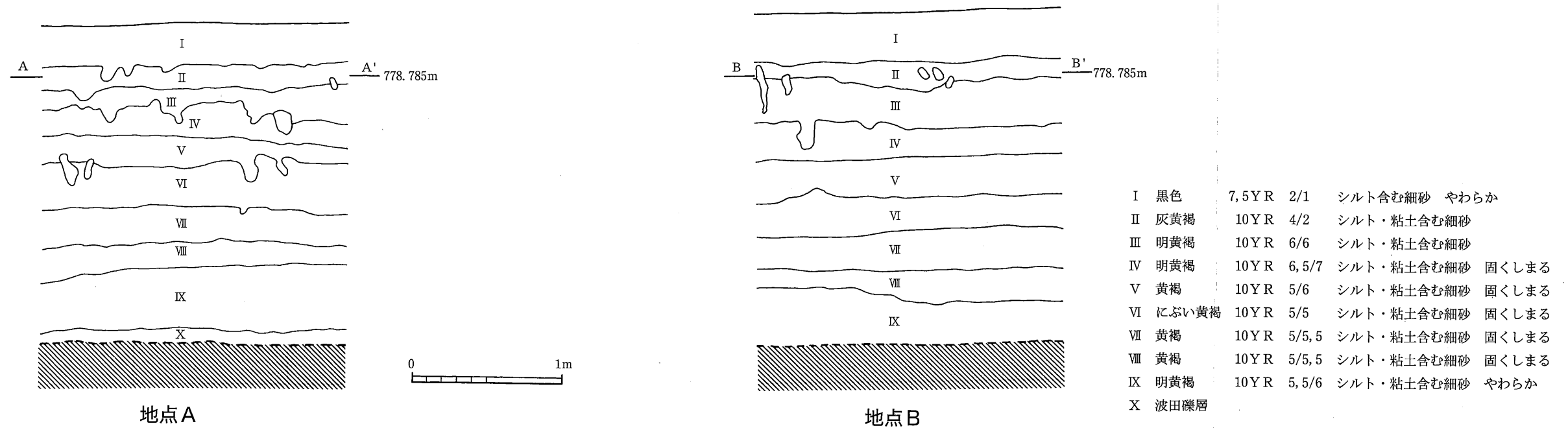
今回の調査で得られた成果は、大きく3点ある。まず1点目は、縄文時代の三ヶ組遺跡の範囲、特に北端部についての資料が得られたことがあげられる。道路建設予定地に沿って、南北に5ヶ所トレンチ調査を行ったことで、北側の様子は、おおむね把握できたと言えよう。従来の遺跡の範囲は、北側にある段丘崖までだが、今回の調査でそこまで遺跡の範囲が、延びないであろうと推測できる。2点目は、試掘調査で2ヶ所、深堀りを行って、いわゆる波田礫層（中新世）までの土層堆積を観察できたことである。長野県教育委員会事務局埋蔵文化財ユニットの西山克己氏から、試掘調査後に行われた保護協議の際、旧石器時代の有無も是非確認してほしいとの要請があつて、実施した。土層観察は、太田圭郁・内堀団両氏に依頼した。結果として、旧石器時代の有無については、第IX層にその可能性を感じるものの、詳しくは、火山灰ガラスの分析をしたほうがよいのでは、という指摘をいただいた。今回は残念ながら、時間・費用の制約があるため、分析を実施できなかったが、指摘を今後に生かしていきたい。3点目は、中世の遺構と遺物を発見できたことである。具体的には溝址1条および常滑焼の甕、東海系の捏鉢、青磁碗片などである。この遺構・遺物を考古学的にどのように評価するか考えるうえで、近接する松本市における中世の集落に関する発掘調査が参考になるだろう。松本市教育委員会および長野県埋蔵文化財センターによって実施された発掘調査が報告書にまとめられている。それらの報告書の中では、調査された溝址の機能を大きく二つに分類している。一つは生活用水路としての溝であり、他は屋敷地を区画するための溝である。今回調査した溝址がどのような機能をもっていたかは資料的に乏しく判断しにくい、この二つの機能のいずれかが考えられる。

中世の朝日村に関しては、散発的な遺物の発見にとどまっている。ここ三ヶ組遺跡でも埋納銭と思われる多量の銭貨が昭和39年に地元の人によって発見されているが調査によるものではないため詳しい出土状況は不明である。おそらく中世の集落址が存在すると考えられるが、今後の調査によって考古学的資料が増加すればその実態が徐々に明らかになっていくことだろう。今後に期待したい。

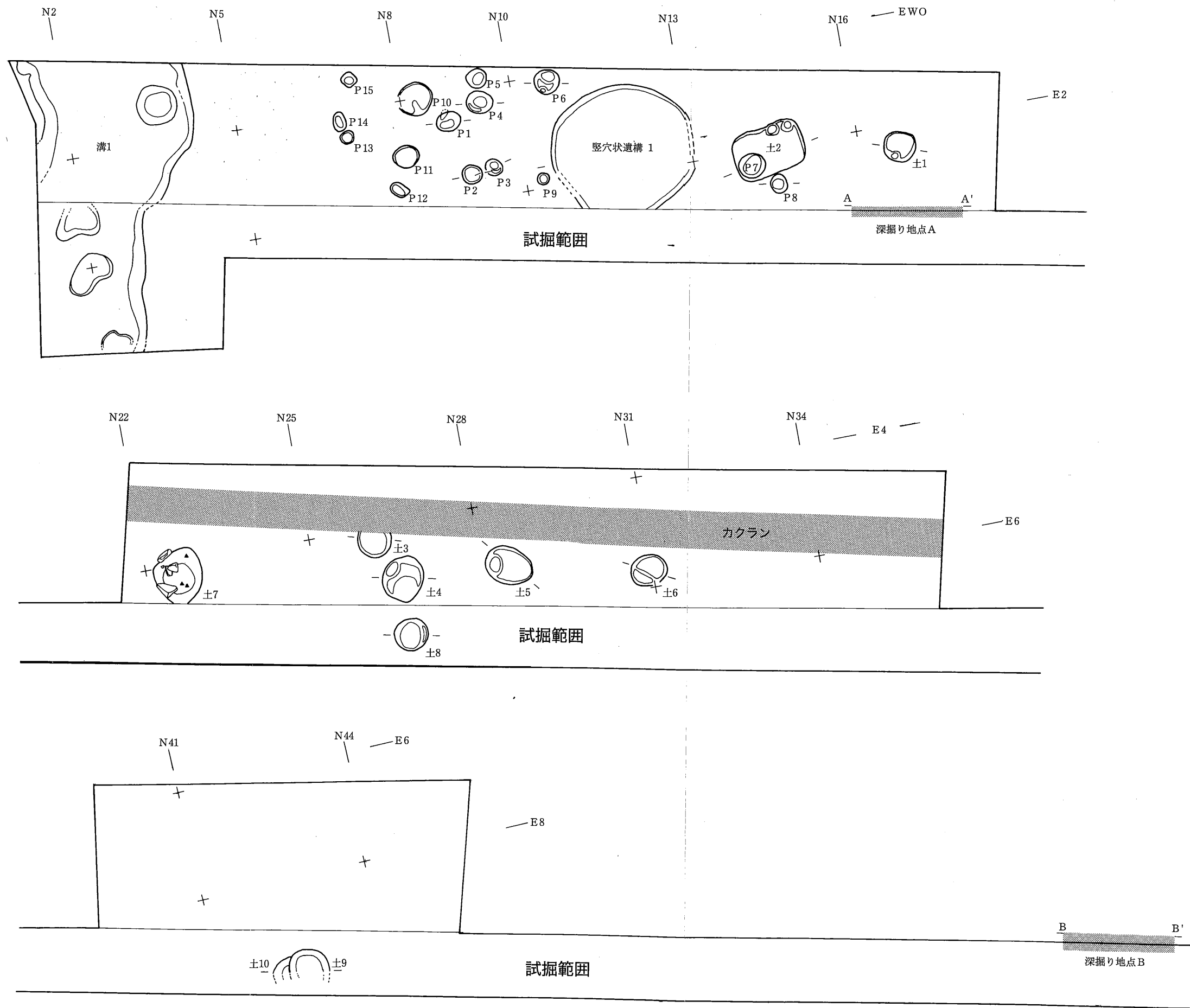
最後に、調査に御協力いただいた作業員の皆様、また関係者ならびに各機関の方々に記して感謝申し上げます。



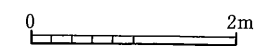
第2図 遺構配置図

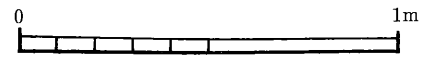
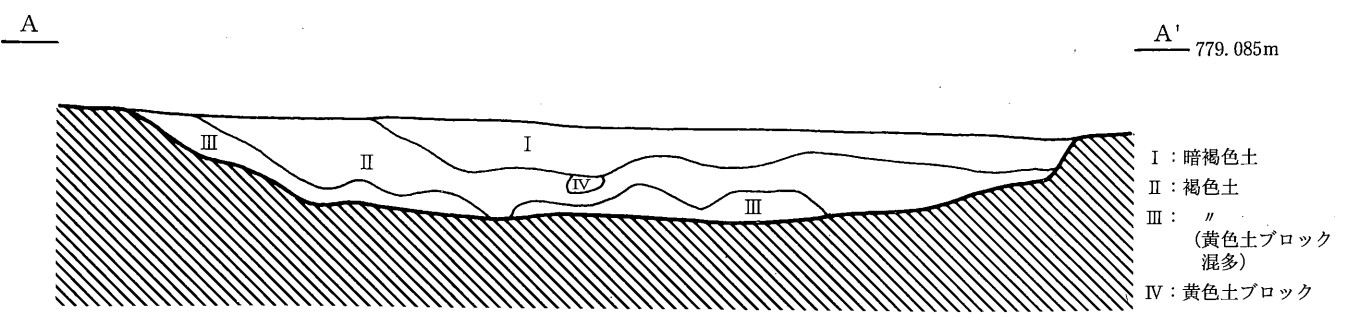
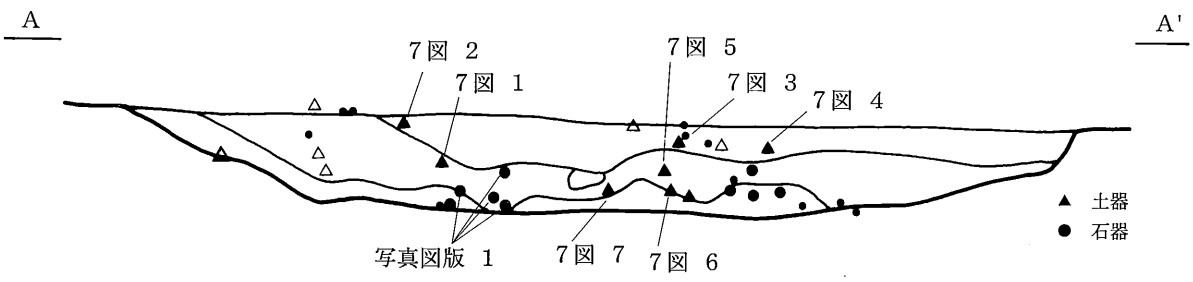
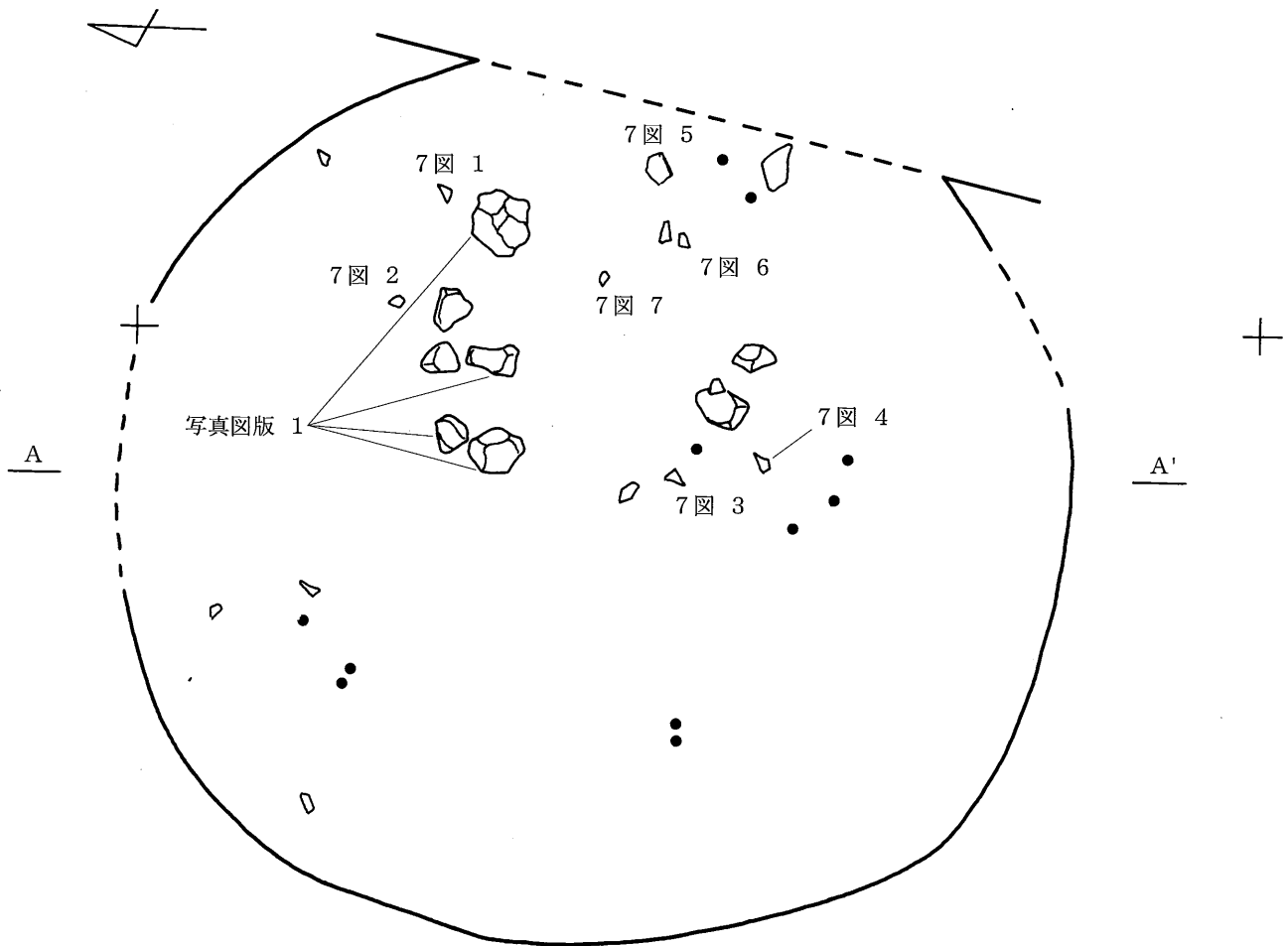


第3図 深掘り地点土層図

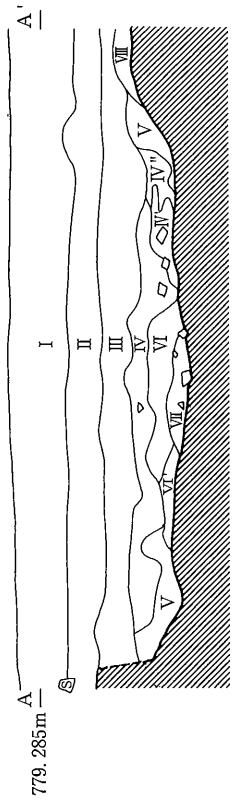
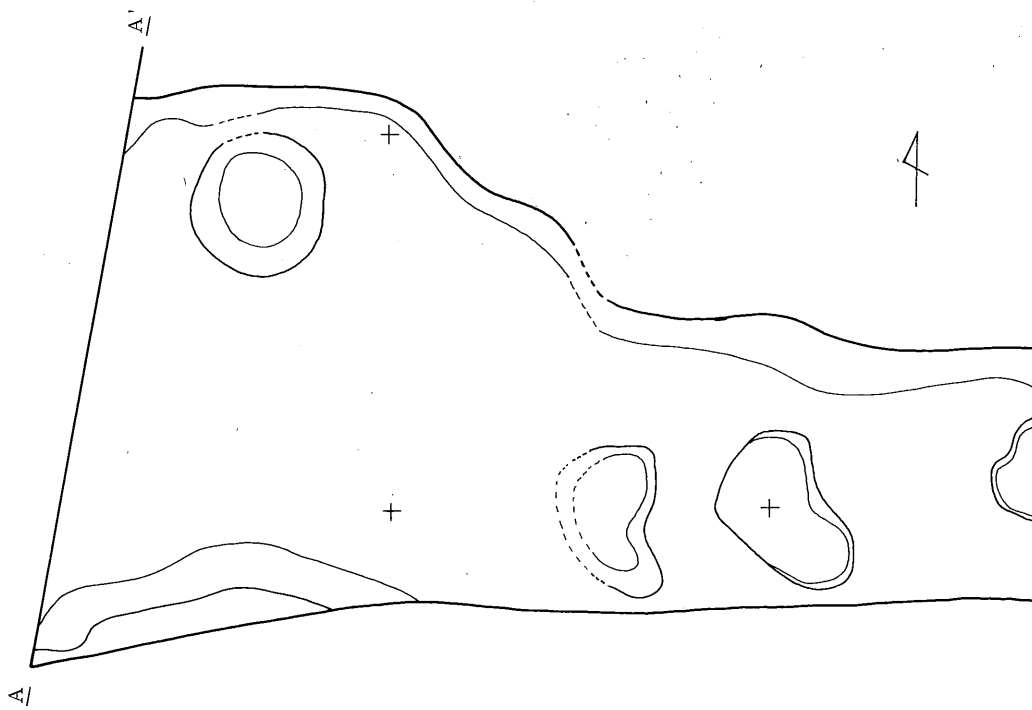


第4図 遺構配置図

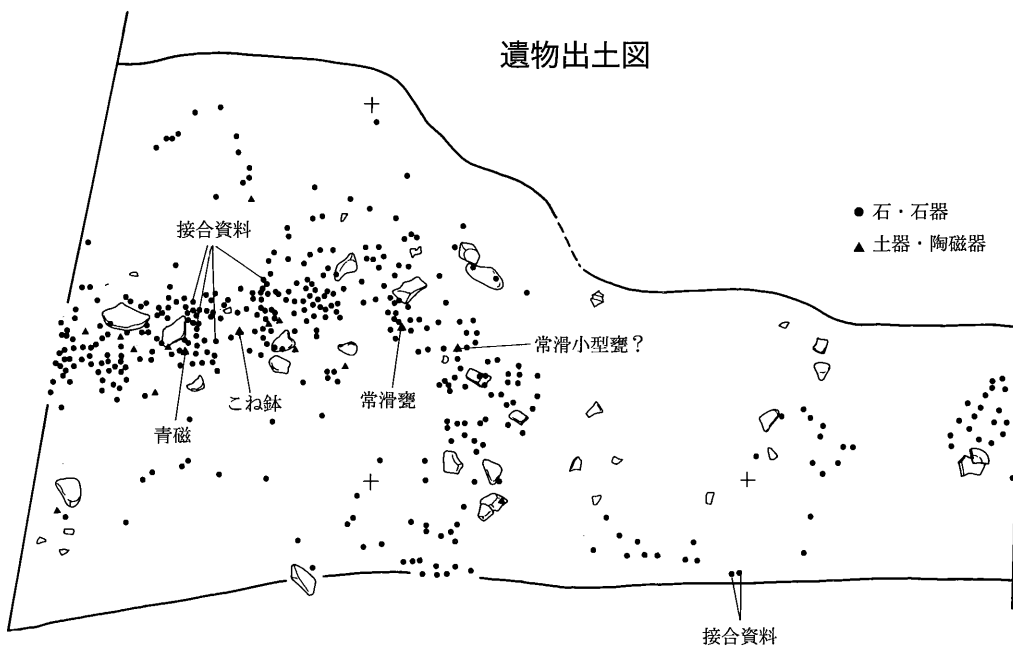




第4図 豎穴状遺構 1



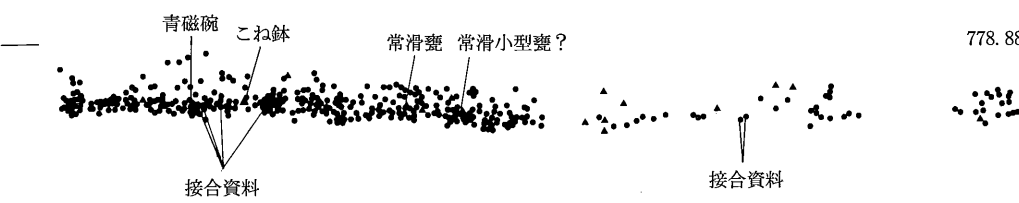
遺物出土図



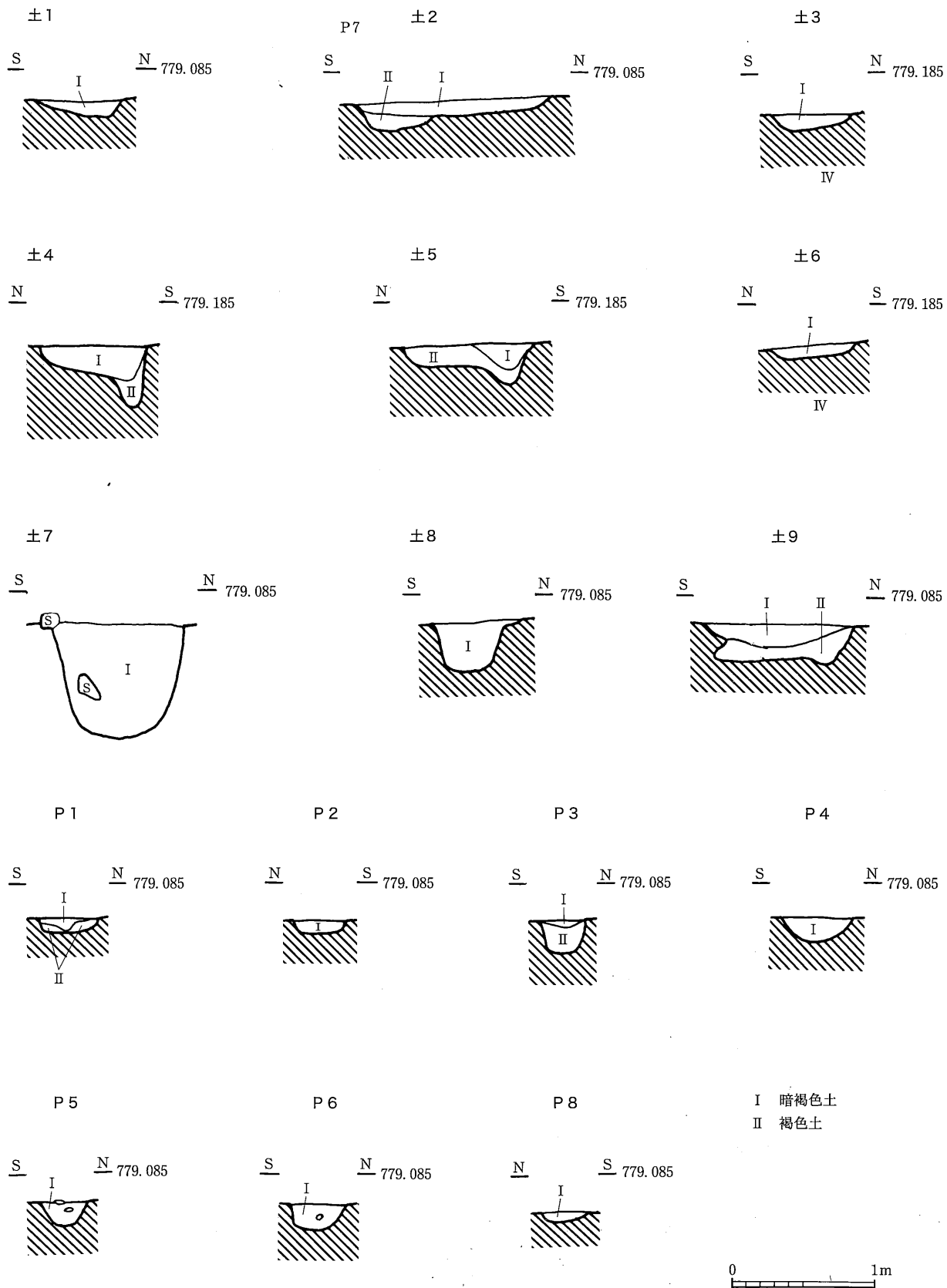
- I : 客土
- II : 灰褐色土
- III : 黒褐色土
- IV : 褐色土
(黄色土粒2~3%混)
- IV' : 褐色土
(黄色土粒混)
- IV'' : "
- V : 暗褐色土
- VI : 暗褐色土
(黄色土ブロック混多)
- VI' : "
- VII : 細砂・小礫
- VIII : 暗褐色土

779.285m

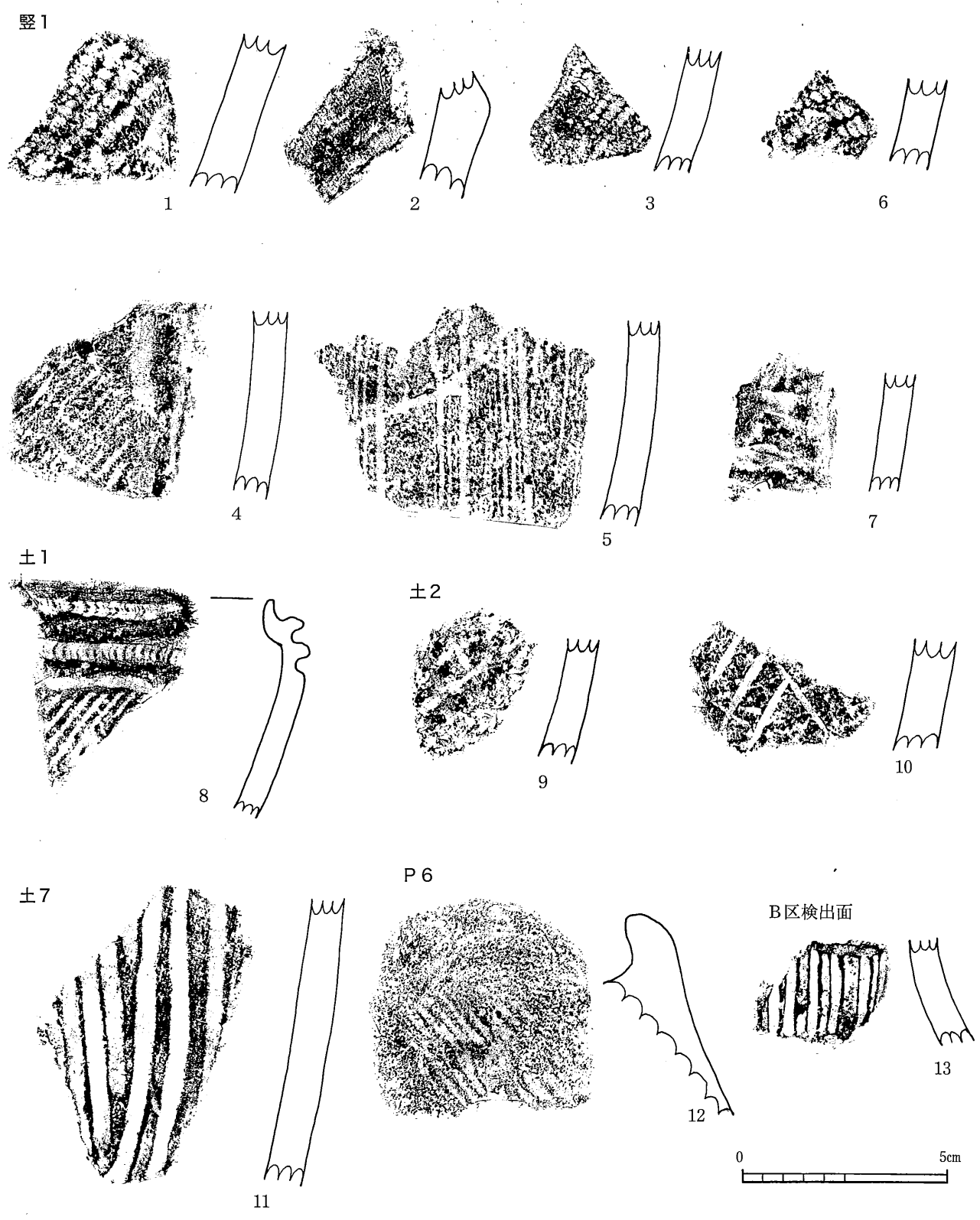
778.885m



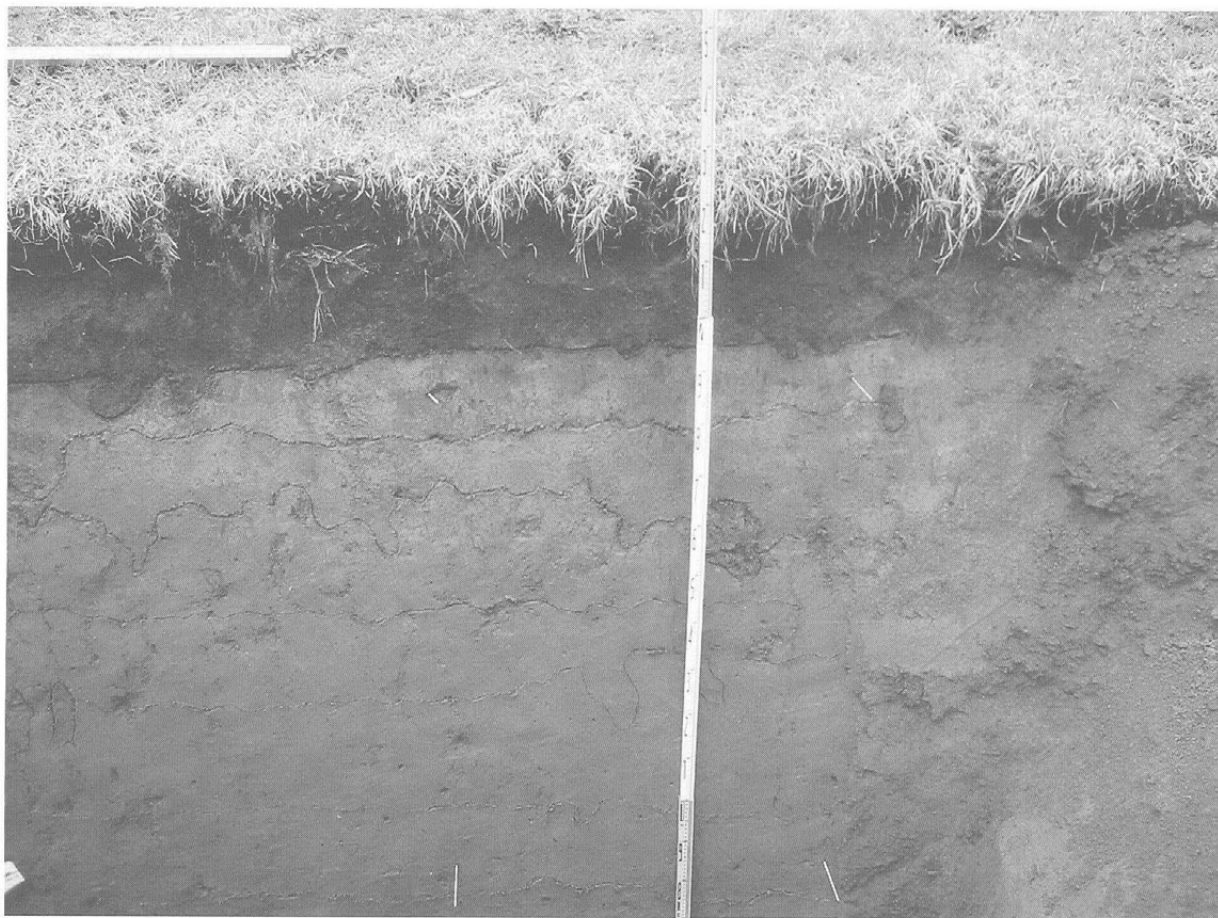
第5図 溝1



第6図 土坑・ピット



第7図 出土土器拓影



深掘地点土層



溝1完掘



豎1完掘



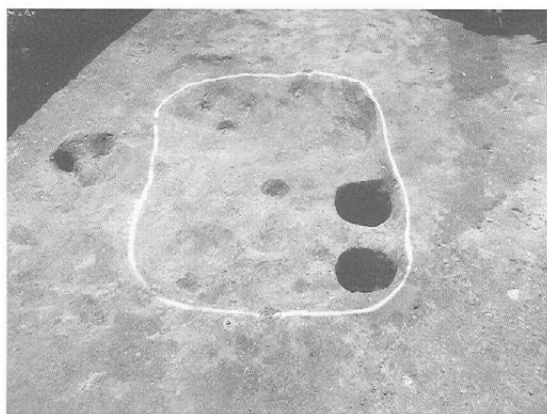
溝1遺物出土状況



豎1遺物出土状況



土坑1



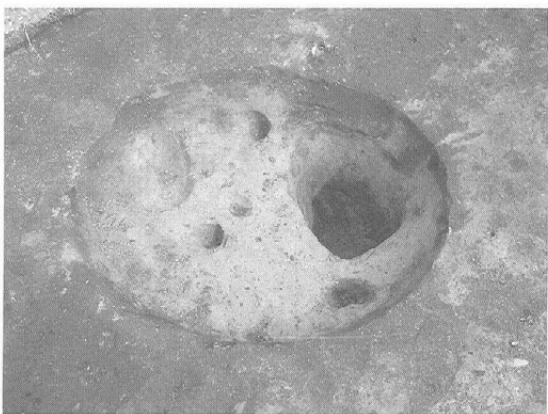
土坑2



土坑3



土坑4



土坑5



土坑6



土坑7



土坑7完掘



A地区全景北から



B地区全景北から



作業風景



T 1 検出状況



T 2 検出状況



T 3 検出状況



T 4 検出状況



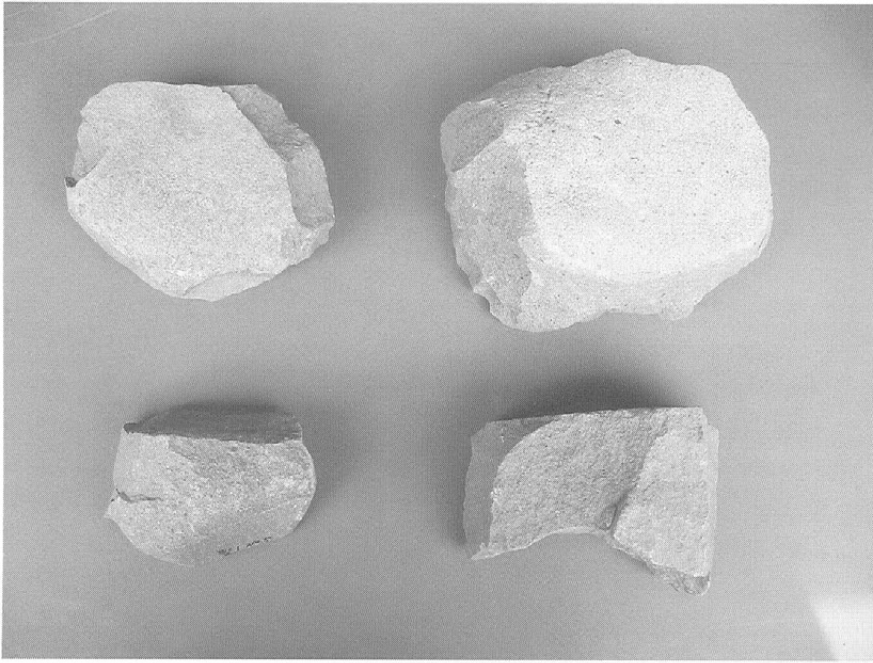
T 5 検出状況



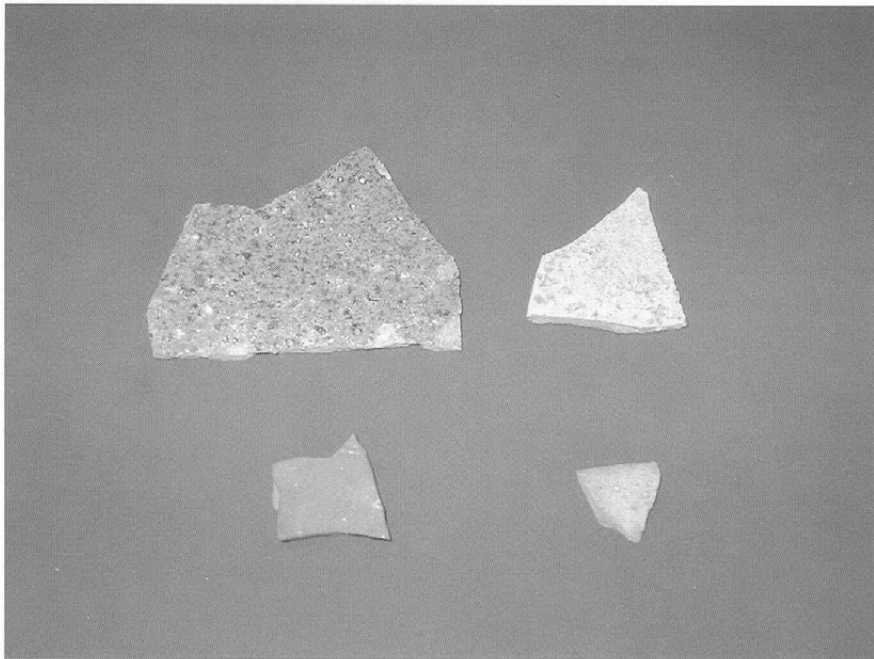
T 6 検出状況



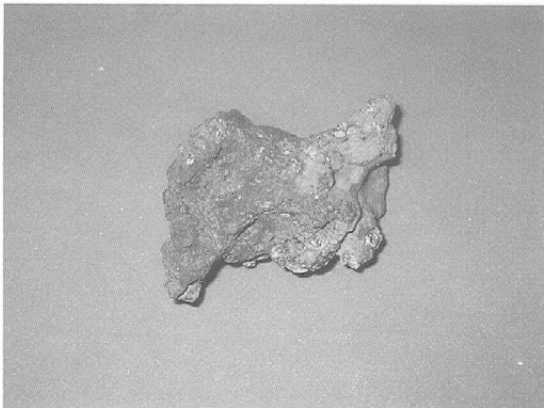
T 6 全景



豎1 出土石核



溝1 出土中世陶磁器 (左上1、右上2、左下3、右下4)



土4 出土鉄滓

長野県東筑摩郡朝日村 三ヶ組遺跡Ⅰ 報告書抄録

ふりがな	ながのけんひがしちくまぐんあさひむら さんがくみいせき 1							
書名	長野県東筑摩郡朝日村 三ヶ組遺跡Ⅰ							
副書名	県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型）西洗馬工区幹線道路工事							
巻次								
シリーズ名	朝日村文化財調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	今村 克							
編集機関	朝日村教育委員会							
所在地	〒390-1104 長野県東筑摩郡朝日村大字古見1286 TEL0263-99-2004							
	(記録・資料保管：朝日美術館・歴史民俗資料館)							
発行年月日	平成18（2006）年9月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんがくみ 三ヶ組	ながのけんひがしちくまぐん 長野県東筑摩郡 あさひむらおおあざにしせば 朝日村大字西洗馬 448番地4	20451	19	36度 7分 12秒	137度 53分 13秒	2006.05.30 ～ 2006.07.31	105.0㎡	県営畑地帯 総合整備事 業・西洗馬 工区幹線道 路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
三ヶ組	集落の外縁	縄文時代 中世	土坑 ピット 溝	10基 15基 1条	縄文土器 中世陶磁器 石器 鉄製品	三ヶ組遺跡の範囲の北端 を確認できた。 中世の遺構を発見できた。		

長野県東筑摩郡朝日村文化財調査報告書
三ヶ組遺跡第Ⅰ次発掘調査報告書

発行 平成18（2006）年9月20日
 発行者 〒390-1104
 長野県東筑摩郡朝日村大字古見1286
 朝日村教育委員会
 TEL0263-99-2004
 印刷 信州印刷株式会社

